

冬の海……

のたりのたりのかな

情報処理教育係長 八巻茂雄

きょうの海は波が小さく、穏やかである。遠く水平線へ目をやると、船影がいくつも小さく見える。ちょっと見ただけでは動いているようには見えないが、数分もすると南から北へ、あるいは北から南へと、どの船も移動しているのに気付く。どこに行こうとしているのかな。どの港から出て、どの港に行くのかな。どういう人が乗って、何を運んでいるのかな。実際はどのくらいの大きさなんだろう。どこの国の船かな。遠くの船は孤独でさびしそうに見える。

沖の方の海面は、濃いエメラルドグリーンである。手前の方はライトブルーである。境がはっきりしていて、潮目なのかな。目を右に移すと、太陽の光が小さな波に反射して白く、そしてきらきらと輝いている。

浜辺には誰もいない。白い砂浜と、湿った黒ずんだ波内際に、もっと白い貝殻が、夜空の星のように点々とある。

そういえば、時期的にはもう少し後だったが、十何年前に子どもがヨチヨチ歩きのころ来て、白くて大きい貝殻を集めていたのを思い出す。子どもの手の平より大きいものを、子どもが何枚か重ねて持ち運ぼうとするが、多すぎて落とし、拾っては重ねて運ぼうとしていた。

それより数年前、教師になった年、遠足でここへ来たことも思い出した。多分、そのとき撮った写真が家にあるはずである。

生徒は、白い襟カラーの制服を着て、帽子をかぶっている様子である。当時は、男子生徒に長髪が許可されたころだ。長髪といっても端正な髪型であった。まだ半数は坊主頭でもあった。浜辺で、ソフトボールをしたりして楽しんでいる写真もある。当時の生徒も今は、もう40歳前後である。

波の白さは変わってないが、砂浜は狭くなったように思う。テトラポットがあちらこちらに置かれてある。あのころこの浜辺では、馬車で砂を運んでいた。当時より松の木が減ってるようだ。遠くに立つ灯台の回りにあった松も少なくなっている。

あの灯台にそのころ父親が勤めていたという生徒が、遠足に来ていた生徒の中に1人いたはずである。いつのころからか知らないが、今は無人になっている。「喜びも悲しみも幾歳月」である。

「春の海ひねもすのたりのたりのかな」といきたかったが、今は冬、2時間もいればやはり寒い。最近、近くの海で遭難し、亡くなった方がいたという。穏やかな海も、変わりやすく、荒れ狂う。遠くを行き交う見知らぬ船の無事を願うものである。

過ぎ去った日々は、あの遠くに浮かぶ船のようで、手に届かない。

これまで卒業していった、また途中で去っていった生徒の、その後の無事な航海と幸せな生活を祈念する。